

石川県災害ボランティア報告②

RQ 能登にて



2024. 11. 4-6 in 石川県輪島市門前町劔地地区

内容

事前活動 10月28日(金)：お菓子作り・手紙作成

11月4日(月) 1日目：被災地見学・体験(朝市、道路、門前町、海岸隆起、避難所体験など)

11月5日(火) 2日目：被災されたお宅のボランティア作業(宮永さんとの出会い)

11月6日(水) 3日目：剣地地区へ手作りのお菓子配り

事後活動：振り返り・12月2日：鳳来東小学校ボランティア報告会

活動場所：石川県輪島市門前町剣地地区

お世話になった団体：一般社団法人災害教育センターRQ能登

参加メンバー

生徒：松野永暉(3年)、菅野唯斗(3年)、野本拳吾(3年)、

恒川玲(2年)、小澤蓮(2年)、小田中陵珀(1年)、熊谷友宏(1年)

スタッフ：池田さちえ、北田侑久、成瀬陽一

目次

① はじめに

② どんなことを経験したのか(3日間の報告)

※①～③は事後に行った、振り返り及び鳳来東小学校ボラ報告会の内容を再編集して記載しました。

一部内容は、報告会にて聞き手に向けて語り掛けている内容・話し言葉が含まれています。語りかけを読みながら、一緒に考えていただければと思います。

※報告会は5月ボラメンバーと行っているため、11月に活動していないメンバーの記録も記載されています。みんなで作り上げたものとしてお読みください。

③ 各生徒の感想

④ ボランティア活動の報告会 in 鳳来東小学校

⑤ 参加スタッフより 池田さちえ

① 【はじめに】

【野呂】 こんにちは。

私達は休み時間や放課後の授業時間外に集まりたい人が集まって活動する「平和と命」のメンバーです。いつもは石川県の事や海外で起こっている問題などについて、ニュースを見たり、どうしたらいいか考えたりしています。

まず、みんなは石川県で1月に地震、9月に水害があった事を知ってますか？

今日はその石川県であった地震と水害についてみんなに考えてもらいたいと思います。

まず、私達は石川県で地震があった事を知り、この事についてニュースを見て石川の状態を知ったり、私達になにかできることはあるかを考えました。考えた中で募金をするという案が出たので、私達は学校行事の時や近くのスーパーなど色々な場所で募金活動をしました。募金活動などを行っているうちに現地に行きたいという思いが強くなったので、学校行事の時にカンパをし、カンパで集まったお金で5月と11月にボランティアに行ってきました！今回はそのボランティアについて発表します。



【恒川】

みんなの大切なモノは何ですか？

私は家族や友達と過ごす時間が大切です。

みんなのも聞きたいけど、心の中で考えながら聞いてください。

② 【どんなことを経験したのか】

1日目：被災地見学・体験(朝市、道路、門前町など)

※報告者：野本・松野

【野本】最初に、地震による被災の様子をお話しします。

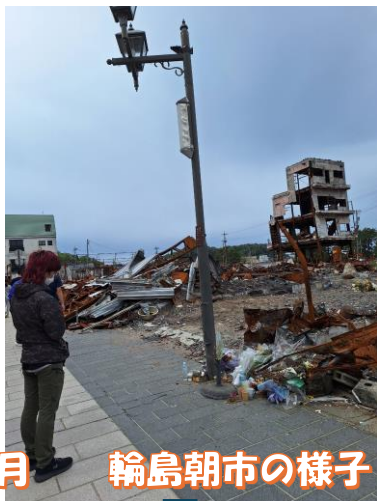
僕たちは5月に石川県の輪島という、一番被害が大きかった場所を見に行きました。輪島の街中は、まるで戦争が起きた後のようにボロボロで、被害の大きさに圧倒されました。次に訪れたのは、輪島の朝市という場所です。ここでは火災が起き、焼け野原のような状態になっていました。とても広い場所で、そこには本来建物がたくさん建っていたはずなのですが、何もなくなって、海まで見渡すことができました。

その後、6ヶ月が経った11月にも、同じ場所を訪れました。朝市は完全に何も無い状態になっていましたが、輪島の街中は大きく変わっておらず、「こんなに被害を受けた場所は、簡単には元通りにならないんだな」と感じました。

次に僕たちは海を見に行きました。なんと、海底の地面が4メートルも上がるという被害があったそうです。写真に映っている場所まで、もともと海があったということなんです。

輪島を訪れて感じたことは、6ヶ月経っても街中が復旧しておらず、「ここにはまだまだ人手が足りないのではないか」と思ったことです。

だからこそ、皆さんも大きくなったとき、もしどこかで災害が起きたら、「自分にできることは何か」を考えてみてほしいなと思います！



5月 輪島朝市の様子



輪島市内の様子①



輪島市内の様子②



11月 輪島朝市の様子



輪島市内の様子①



4m隆起した海

【松野】

次に、水害による被災の様子をお話しします。

僕たちは、11月にボランティア活動をするために深見地区へ行きました。深見地区は深見川という川の周りを囲むように建物が立っている小さい集落でした。深見地区は9月の下旬に起きた大雨の被害を受けていて、その痕跡は自分たちが行った時にも集落全体に残っていました。深見川は深さ3m位の堀の中に水が流れていて、水深は歩いて入れるくらいでした。



水害被害の深見地区





そこから水が上がって来て、地面から 120cm 位の高さまで水が来た跡がありました。

当然、こんな高さまで上がって来た泥水は家の中まで入って来ていました。泥水が家の中に入ると家具や内壁、床に水が染みて使い物にならなくなってしまいます。

自分たちが行った時には家具は全て片付けられ、壁や床は外されて、ほぼ柱と天井だけでした。多分そこには家具や思い入れのある物、それぞれの生活があったんだと思うんです。

そんなところが取り壊されているのを見て、自分は人間が住んでいた痕跡とか思い出が無くなってしまったように感じました。もし自分の家がこうなったら仕方ないのはわかってるけど、どうしようもないやるせなさとか悲しみが湧いてくるのかなと思いました。

この経験を得て、改めて人間の力じゃ自然の力には敵わないなと感じました。しかし、被災した場所に限らずこの地球上に住むということは、災害と付き合っていないといけません。なのでこれから先、災害が起こらないようにするのではなく、起きた時にどうするか、という考えを持っておきたいと思いました。

お世話になった、RQ 能登とは・そこで経験したことは

※報告者：白井

【白井】 5月と11月に僕たちと活動してくれたRQ 能登さんについてお話しします。

RQ 能登さんは、地域の人一人一人のことを考えて、その人の考えやペースに合わせて活動をしているボランティア団体です。このRQ 能登さんでは気持ちがあれば、耳が聞こえなかったり、僕たちのような高校生など他の団体では受け入れて貰えない人でも受け入れてくれて嬉しかったです。

ここにはリーダーのダイゴさんという人がいて、地域の人との関わりを大切にしている、みんなに信頼されている頼もしい人です。

夜には実際に避難所として使われていた体育館のようなところを借りて、ダンボールベッドで寝ました。なぜダンボールベッドで寝たかという、実際に避難していた人の気持ちや場所を知りたかったからです。体育館にはこんな感じの空気を入れて膨らませるマットがあって、使って寝ました。

僕は寝たとき、寝袋に入ってダンボールベッドに直接寝た方がよく寝れたんですけど、このマットって空気が入っているから、冬に使うと暖かくていいなと思いました。

今回、RQ 能登さんと活動して、ボランティアの人が食べる美味しい料理を作ってくれる人や、地域の人にマッサージをする人など、直接作業する以外にもできることがあると気づきました。

そして休憩の時に話しかけてくれたり、一緒に笑い合ってくれたりして、初対面だったけど、活動の中やご飯の時とかに仲良くなれて、友達のように感じました。



賄いボランティアさんが美味しい
昼食を作ってくれていました。
毎日の昼食が楽しいメンバー。



RQ能登コーディネーター：醍醐さん(左)



2日目：水害にあった深見地区でのボランティア活動

※報告者：菅野・熊谷

【菅野】11月のボランティアは、水害被害の片付けやお菓子配りを行いました。

活動1日目のボランティアで、僕達は震災や水害の被害により、家の中や敷地内に積もった大量の泥を、一輪車の上に乗せて川に捨てる作業を一日中行いました。この時の泥は沢山の水を含んでいて、思いっきり力を入れないと思わず倒れ込んでしまいそうなほど重かったです。

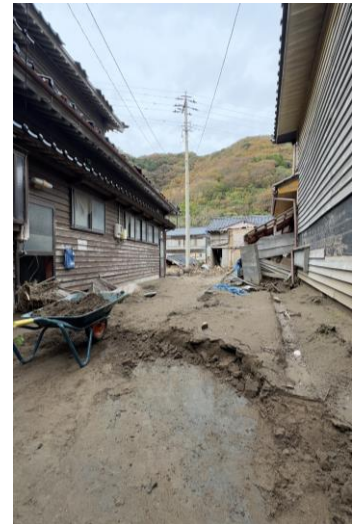
泥の他にも震災などで割れたガラスや、落ちた瓦が混ざっていて、1つ1つ分別しながら取り組みました。なので、思っていたよりも大変で時間のかかる作業でした。



家屋に入った土砂を捨てる



ひたすら泥かき



【熊谷】自分は主に三つの作業をしました。

一つ目は木材を軽トラに乗せて置き場に持っていく作業で、量はそんなになくて「ふう、こんなの余裕だぜ」って感じでやっていたけど、持っていく場所がそこそこ遠くて「もうちょっと近くに捨てられないのかな」って思いました。

二つ目は壁材を軽トラに乗せて、さっき行った場所に持っていく作業で、木材よりも量があって「ちょっと量あるし、ちょっと疲れたけどまだまだ動けるぞ！」って感じで、さっきと同じで持って行って戻ってくる作業をしました。

三つ目は大型トラックに土嚢を乗せる作業で、結構量があって、マジで重くてやってる時「あ～マジで疲れる～」って感じで、終わった時は「やっと！終わった！！」って感じで、この作業が一番疲れしました。



災害で出た、不用品は地域から20分ほど離れたところにありました。



3日目：剣地地区へ手作りのお菓子配り（在宅支援）

※報告者：小田中・小澤・恒川

【小田中】11月のボランティアでもつるぎち地区の方々へお菓子を配りました。今回は、お菓子配りと一緒に、配食も行いました。配食とは、ご飯を自分でつくることが大変な人たちにご飯を配る活動です。さまざまなお家を訪ねながら、いろいろな人からお話を聞きました。

一番被害が大きい場所に子供がいて、ボランティアさんに助けてもらっていた方がいて、そのことを泣きながら話してくれた。僕はその話を聞いてとっても嬉しく感じました。なんでかって言うと、この人の一番大事なものは失わずに済んだんだなって思ったからです。

配食中にお家に入れてくれたおばあちゃんがいて、その息子さんが被災した能登のことを教えてくれました。1つの家では使いきれないほどの支援物資を貰えるということ、配食だけで十分でそれ以上もらって申し訳なくなると言うこと、地震がトラウマで国が被害を受けたお家を壊す時の音が地震に似て寝れないということ。それでも、この場所は夕日が一番綺麗に見えるということ、この場所が大好きだということ。いろいろなことを教えてくれました。



【小澤】

ここからは、「ボランティアってなんだろう」「ぼくやわたしにとって大切なモノってなんだろう」という

ことを一緒に考えたいと思います。

もしも生活できなくなったら、みんな周りに助けを求めると思います。助けてくれる人の事をみんなボランティアって言います。けどボランティアって言葉は1括りにするととっても難しい言葉です。人によって、色んな思いがあるからです。

【恒川】

皆さんは、災害ボランティアはどんな活動をすると思いますか？

私はボランティアに興味を持つまでは、片付けのお手伝いをする、作業をすることだと思ってました
でも、だんだんボランティアを知っていくと、それだけじゃ無いことに気づきました！

私の話を聞いて、みんなもボランティアは何か考えてみてね。

私は、ボランティアは災害に遭った人達が少しでも前向きな気持ちになれるように、お話をしたり、聞いたりすることも大切だと思います。

自衛隊の人達だと、作業中心になってしまうことがあるけど、ボランティアだと、作業以外にも人とのコミュニケーションを通して、被災者達の心の整理もお手伝いできます。

みんなも、落ち込んでる時に優しい言葉をかけられたり、励ましてもらおうと、元気になれるよね。

きっと、被災者の人達もそんな言葉に少し元気をもらってるんじゃないかなって思うんです。

だから、私は被災者の人達の気持ちにも寄り添えるボランティアはなくてはならない！大切な存在だなって思いました。

じゃあ、ハリーの思うボランティアって何？



【小澤】

僕の思うボランティアは、「自分が出来ることを出来るだけ相手の為がんばる。」作業とかが全てじゃなくて、辛い思いをした人の気持ちになってみる。これもボランティアだし、被害を受けた人の事を考えてみる。これもボランティアだと思う。

僕は、前回の5月、地震があった石川県に行きたかったけど、どうしても人数的に行けなかった。

そんな時、僕、お菓子作りが好きなんだけど、それで石川県の人に元気になって欲しいなと思って、5月頃はクッキーとか作って持ってってもらいました！自分では、これもボランティアじゃないかな、と思う。今回も、「琥珀糖」という砂糖で作ったお菓子を作って持っていきました！

石川県全体の人に配ることは出来なかったけど、渡した人全員が笑顔になってくれました。

配り始め、最初はどんな言葉で渡したら自分の石川県の思いが伝わるかな、とか思ってたけど、顔を合わせてみて話してみて、だんだんと笑顔になれました。

例えば、「愛知県から来ました！」って言うと、

「そんな遠くからわざわざありがとう」って泣きそうになるくらい喜んでくれる人や、地震のせいで周りに人が居なくなったから、たくさん話をしてくれた人もいました。みんな、とっても暖かい人でした。けど、1軒だけ受け取ってくれなかった家がありました。

僕達は話し合っって考えてみました。

「貰うと『ありがとう』よりも、『私のためにごめんなさい』という申し訳ない気持ちになってしまうんじゃないかな」って。どうしてかというと、地震が起きてからだいたい1年が経ちます。

その間、ずっとその場にいた人は「被災した人」で、ずっと誰かしらに助けってもらって生活をしていました。

もし自分が「被災した人」だったらどうだろう。考えてみよう！

いろんな人が生活してるから、実際は分からないけど、考えてくれてありがとう！

自分の今考えたこと、大切にしてくれ。僕は配るために家を回ったけれど、そこで繋がりを感じられました。人間は1人では絶対に生きていけない。そう思われました。



全体の感想

【菅野】僕にとって初めてのボランティアでした。

現地に行くまでニュースとか新聞で復興が進んでいると報道されていたから、「大体の場所は元通りになってるのかな??」と思っていたけど、実際はそんなことなく、ニュースで取り上げられていた所以外は復興が進んでなくて、潰れた家や割れたガラスがそのまま放置されていて、そこに住んでいた人達の生活の中にある大切なモノが地震がきっかけで無くなってしまったんだって考えると胸が痛くなりました。それでも、一生懸命今を生きている人達がいて、現地で活動していると笑顔で「ありがとう」って言って貰えて、その一言だけでも「ボランティアで助けに行っって良かった」と心から思いました。

【小田中】僕のお父さんとお母さんは耳が聞こえない人で、いろんな人に助けってもらって生きてきていました。なので、できることなら助けられるばかりではなくて、絶対に助けられる時は助けようと考えていました。そんな時にボランティアの誘いがあったって、話を聞いた途端に即答で「行きたい!」と言って行きました。

輪島に着いた時に、テレビやネットで見るよりもずっとひどい状況で、自分が見ていたのは一部の復興

が進んでいるところだけなのだと思います。それでも能登の人たちは諦めずに元気に過ごしていて、すごいなと思いました。僕なら、せっかく地震の被害を少しずつ直していたのに豪雨でそれが台無しになってしまったら、もう嫌になってどうでも良くなると思うからです。

大体のボランティア団体さんでは、障がい者さんや高校生の受け入れをしてくれないことがとても多いです。でも、RQ 能登はそんな他のボランティア団体さんではあまり受け入れないような人たちでも、気持ちがあれば受け入れてくれるのがとてもいいと思いました。

僕たちが行くときに、たまたま耳の聞こえない人がいて、少し手話でお話できました。

自分がいろんな人に感謝されて、少しは誰かの助けになれたのなら、やっぱり行って良かったと思います。



【松野】今回、一緒にRQで活動した他のボランティアさんから聞いた話で、その人は全国を旅していて、そこで知り合った人からRQを教えてもらい、RQ 能登に来たという話をしてくれました。

この話を聞いて、自分は「繋がってるな！」って思いました。なんでかって言うと、ボランティアに参加した人がその体験をみんなに伝えて、その伝えられた人が興味を持って能登のために何かできるかなって考えたり、実際にボランティアに行ったりして、能登に対する想いが繋がっていくんじゃないかなって思いました。だから、今回の話を聞いて興味を持ったり、能登とかボランティアに今後行くことがあったら、そこで思ったこととか経験をみんなに伝えてほしいなって思います。

あるがままに

Capo D. C

C G Am F
涙もなくなぜかとても悲しいのは
C G F C
それはきっと誰かが悲しんでいるから
C G Am F
そんな時君と一緒に唄っておくれ
C G F C
どこかで誰かがきっと少し元気になるから

Am G F C
※そうさすべてのものは響きあい
C G F C
君と僕すべてのものはつながっている

C G Am F
魚の吐息は雲になり
C F C
雨になり川となって僕に流れる
C
僕の吐息は森を抜け
風になり空を舞い鳥を抱きしめる

Am G F C
※花も海も大地も宇宙も
C F C
君と僕すべてのものはつながっている

遠くの街で君が寂しい時
思い出してごらんよ友達のこと
初めて出会う人も愛があれば
心配ないよ大丈夫 解りあえるさ

あるがままにあるがままに
地球の呼吸と呼吸を交わし
あるがままにあるがままに
君と僕すべてのものはつながっている

君と僕すべてのものはつながっている

・・・ここで歌います。この歌は僕たちがボランティアに行くことになって、ことあるごとに歌ってきた歌です。現地でもRQで歌わせてもらいました。大切な曲です。聞いてください。

【野呂】

最後に、このボランティアを通して、私は元の石川に戻るには想像しきれないぐらいの時間がかかるなと思ったので、みんなで協力しながら少しずつ前に進んで行けたら良いなと思いました。

そして、今の私達に出来ることは、今回の様な場を通して石川の状態を発信して、少しでも多くの人に知ってもらおう事や、石川について考える事かなと思いました。

なので、みんなも今日の私達の話をお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんなどに伝えて下さい。

そして、自分達になにか出来ることはあるか、大切なものは何かを考えてみてください！

これで私達の発表を終わります。ありがとうございました。



③ 【今回のボランティアに参加して（各生徒の感想）】

参加したメンバーには、ボランティア終了後に①～⑨の質問を投げかけ、思いを書いてもらいました。この投げかけ以外にも思ったことはたくさんあり、その思いをまとめて報告したのが、鳳来東小学校での報告会になります。

●野本拳吾（3年）

①印象に残ったできごと、言葉などは？

深見地区でのボランティア活動では、ひたすら泥を運び出して捨てる作業を続けました。何度も往復したにもかかわらず、一日かけても目標の半分ほどしか終わることができませんでした。それでも、自分が担当したのは被害のほんの一部に過ぎない考えると、たった一度の水害でこれほどの被害が出たのだと身をもって実感しました。

②行く前にどんな思いがあった？



今回2回目のボランティアに参加したいと思った理由は、半年前と比べて能登や自分自身がどのように変化しているかを、実際に感じたかったからです。そのため、前回のボランティア以上に、自分にとって意味のある活動にしようと決意していました。

③被災地見学・体験で感じたこと

朝市などの大きな場所では復興が進んでいると感じましたが、小さな町などではまだ手が届いていないと感じました。震災から10ヶ月が経ってもこのような状態であるため、ボランティアの人手がまだ足りていないのではないかと思います。

④深見地区でどんなボランティア活動をしたか

ひたすら泥を運び出して捨てる作業を行いました。お家の玄関周りを担当し、泥だらけの地面からスコップで泥をすくい、一輪車に移して運び出しました。40回ほど往復して泥を捨てに行きましたが、それでも半分ほどしか終わりませんでした。

⑤水害にあった深見地区で感じたこと

あの被害の規模を見て、どれだけ大きな川が氾濫したのかと考えていましたが、実際には想像とは反対に、すごく小さな川でした。その川の氾濫によって町中が泥だらけになり、自然の恐ろしさを改めて再認識させられました。

⑥お菓子配り(配食)で感じたこと

前回のボランティアでお菓子を配ったことを覚えていてくれた方が結構いて、嬉しかったです。また、こうした活動を通じて人々が繋がっていくんだなと感じました。さらに、相手のペースに合わせることで、例えば喋る速さや声の大きさを調整することが、ダイゴさんが言っていたことだと実感しました。

⑦RQで過ごして感じたこと

前回は感じていたことですが、やっぱり皆さんはとても暖かいと感じました。わからないことを丁寧に説明してくれ、やることは異なっても、能登を良くしようという思いを皆さんから強く感じ取ることができました。

⑧あなたの思う復興(ふっこう)って何？

前回と変わらず、その町の人たちが元のように生活できるようにすること。

⑨あなたの思うボランティアって何？

被災した方々のために思って考えて行動すること。

●菅野唯斗(3年)

①印象に残ったできごと、言葉などは？

現地の惨状は、ニュースや新聞で取り上げられていた光景のほんの一部にすぎません。「復興が進んでい



る」と報道されてはいたものの、実際にはわずかな部分だけが進んでいるにすぎず、震災から5ヶ月が経った今でも、復興や解体がほとんど進んでいない地域があるという事実が印象に残っています。

②行く前にどんな思いがあった？

震災や水害の被害状況を実際にこの目で見るまでは、新聞やニュースで「能登半島で震災があった」「100年に1度の豪雨が降った」といった情報をちらっと見たり聞いたりするだけでした。そのときは、「大変だな」「こんなことがあったんだ…」と、あくまで他人事のように考えていたのです。しかし、もし被災地の方々に助けられる機会があるなら、ぜひ力になりたいと思っていました。

③被災地見学・体験

倒壊した建物や水害に遭った建物を見たとき、どの建物も倒れ壊れて泥にまみれてはいたものの、比較的清潔さが保たれており、目立ったホコリや汚れが少ないように感じました。そのため、これまで当たり前のように続いていた日々の生活が、震災や水害によって突然奪われてしまったという事実を目の当たりにし、胸が痛くなりました。

④深見地区でどんなボランティア活動をしたか

主に家と家の間にある道に、水害で溜まってしまったガラスや瓦が混じった泥を分別し、一輪車にまとめて運び出し、川に捨てる作業を一日中行いました。

⑤水害にあった深見地区で感じたこと

活動中に気づいたことですが、水害の影響を受けたと思われる川は薄汚れてはいるものの、そこまで荒れているわけではなく、むしろ静かで穏やかに流れていました。そのため、どんなに優しく穏やかな川であっても、水害になるとガラスを勢いよく割ってしまうような、想像を超える被害が生まれるのだと感じました。

⑥お菓子配り(配食)で感じたこと

配食で地元の方々に食事を配りながら回っていると、多くの方が笑顔で感謝の言葉をかけて受け取ってくれましたが、1人だけ受け取ってくれなかった方がいました。その方の表情はどこか暗く、思い悩んでいるようにも見えました。その表情から、被災をきっかけに消えることのない心の傷ができてしまっていることに気づきました。

⑦RQで過ごして感じたこと

他の工事の方々との連携や、昼ご飯の振る舞いなどを通じて、地域の方々やボランティアの方々の協力が惜しみなく発揮されているのを感じました。RQ能登さんがいかに信頼され、手を取り合って支え合ってきたのが、行動や雰囲気から伝わってきたと思います。

⑧あなたの思う復興(ふっこう)って何？

前述したように、今まで通りの暮らし、いわゆる「当たり前のような日々」を再び送ることができるようにすることが、僕が考えるべきことだと思っています。

⑨あなたの思うボランティアって何？

復興は単に元通りにすることだけではなく、被災者の心の傷や悩みを親身に受け止め、その想いやペースに寄り添い、協力し合って依頼を成し遂げることだと考えています。

⑩他に何かあれば

今回初めてボランティアに参加し、実際の被災地を訪れました。そこで、③⑤⑥のような被災地の惨状や、その現実を被災者の方々がどのように受け止めているのかなど、実際に見て触れなければ感じられない体験や活動を行いました。助けることで、被災者の方々の心境にどのような変化があったのかを直に感じることができました。この経験を元に、「どのように活動し、何を学んだのか」「どうすれば皆に分かりやすく、また活動に興味を持ってもらえるのか」を考え、今後も取り組んでいきたいと思います。



●松野永暉（3年）

①印象に残ったできごと、言葉などは？

3日目の配食の時、午前の最後に訪れたおばあちゃん一人暮らしのお宅でのことです。手伝いに来た息子さんから、東京に住んでいて、剣地と東京を行き来しているという話や、東京にいる時は毎日おばあちゃんと電話をしているという話を聞きました。また、門前町から剣地までの海岸線が整備されていて、西陽が海の真ん中に落ちる景色が綺麗だと自慢してくれました。その話をしている中で、息子さんの表情や言葉のニュアンスから、おばあちゃんや実家、そして門前町という地域をととても大切に思っていることが伝わってきました。息子さんの熱い思いに感動しました。

②行く前にどんな思いがあった？

一番の関心は、能登の人たちや地震や大雨で被害が出た場所がどうなっているのか、またボランティア活動がどんな感じなのかということでした。その上で、石川の被災者の方々に何かできることがあれば、ぜひやりたいと思っていました。

③被災地見学・体験

最初に朝市の現場を見た時は、コンクリートの山くらいしかなく、ほぼ更地で「何もないな」と感じました。しかし、改めて朝市の写真を振り返った時、ここには建物やそれぞれの生活があったのだろうと思いました。そんな場所が取り壊されて、そこに住んでいた痕跡や思い出が無くなってしまったように感じ、もし自分がその状況に直面したら、仕方ないことだと理解しつつも、どうしようもないやるせなさや悲しみが湧いてくるのだろうと思いました。

④深見地区でどんなボランティア活動をしたか

- 家の中に集められた壁の土を土嚢袋に詰める作業
- 外に溜まった泥をかき出す作業
- 家の床板一枚一枚に数字とひらがなを書く作業（床板を外した後、再びはめ直す際に、どこの床板かが分かるように）

⑤水害にあった深見地区で感じたこと

その時見た深見川は、歩いて入れるくらいの水深でしたが、家の窓まで水が胸の高さくらいまで上がった跡があり、驚きました。さらに、ここまでの豪雨があったのなら、泥が積もるのも納得できるし、深見地区ではない場所でも家が流されてしまうのだろうなと思いました。

⑥お菓子配り(配食)で感じたこと

道端で近所の人と談笑したり、畑作業をしたり、「ショップつるぎち」という個人店を開いたり、剣地の人たちそれぞれが前向きに新しい生活を始め、これまでの生活を取り戻しつつあると感じました。それは、剣地の人々とRQが寄り添い合いながら前に進んできた結果だと思いました。また、住民の方が最初にRQが剣地に来てくれて助かったという話や、他の住民の方とダイゴさんが楽しそうに話しているのを見た時、RQが剣地で築いてきた信頼関係が見えた気がしました。

⑦RQで過ごして感じたこと

女性ボランティアの方が話してくれたことですが、その方は全国を旅している中で出会った人がRQボランティアに参加していて、そこからRQを知り、実際に参加することになったそうです。その話を聞いて、私は「繋がっているな」と感じました。ボランティアをした人がRQのことや現場の状況を発信することで、能登に対して興味を持った人がボランティアに参加し、さらに繋がりが広がっていくのではないかと思います。だからこそ、今回の体験をみんなに伝え、能登に対する思いを繋げていければと思っています。

⑧あなたの思う復興(ふっこう)って何？

その地域の人たちが、災害前のように自立して生活できるようにすることが重要だと考えています。

⑨あなたの思うボランティアって何？

復興に前向きな被災者の方も、そうでない被災者の方も、それぞれがやりたいことを実現できるように寄り添い、考え、サポートすることが大切です。被災者の選択肢を増やすことが求められています。

●小澤蓮(2年)

①印象に残ったできごと、言葉などは？

耳が聞こえないいわなさんが、誰かのために頑張っている姿を見て、とてもかっこいいと思いました。何か間違えた時には、ジェスチャーや伝わるように話してくれて、嬉しかったです。また、お菓子を配っている時に、断られたことがあって、なぜだろうと思いました。

②行く前にどんな思いがあった？

石川がどんな状況なのか、ニュースではすべてを知ることはできないから、まずは現地のことを知ろうと



思っていました。OCの手伝いをしていると、終わり際に「え、明日？もう明日？」と驚き、あっという間に時間が過ぎていました。行く前は本当にずっとドキドキしていて、四国に行く前日の気分と似ていたなと思いました。

③被災地見学・体験

朝市の場所は、ここに本当に建物があつたのかと思うほど平坦な土地が広がっていて、驚きました。その場の雰囲気や空気が重く感じられました。所々で地面が盛り上がり割れていたり、マンホールが浮き上がっていたりして、びっくりしました。周りを見渡すと、ボランティアのギブスを着た人たちがいて、復興に向けて頑張っている様子が伝わってきました。ここがまだ生きている場所だと実感しました。水害の影響で砂埃や倒木が流れているのを見て驚きました。ザーザー音を立てて流れる川を見られる場所はありませんでしたが、周りの木々がなくなっているのを見て、「本当にあつたんだ」と思わせられました。家が流された場所を見ましたが、跡形もなく、まるで元からなかったかのようでした。仮設住宅の中に砂が入っていて、「せっかく作ったのにな」と思いました。また、川の水がとても綺麗だなとも感じました。

海がなくなったかのように広がるビーチを見て、波打ちブロックの手前にあるのに全く水が来る気配がなく、土地が上がったことを実感しました。ボートが置いてあつた場所に近く、ボートが見当たらないので、流されてしまったのかな、どこに行ったんだろうと思いました。また、漁業を再開するなら、どうすれば良いのだろうと考えました。

④深見地区でどんなボランティア活動をしたか

初めは、必要なくなったものを軽トラに積んで運んでいましたが、軽トラには2人しか乗れないため、基本的には泥のかき出しを手伝うことになりました。あいさんといわさんが床下に潜って溜まった泥をかき出し、それを一輪車で運び、川へ捨てる作業を繰り返しました。

⑤水害にあつた深見地区で感じたこと

地面が削れていて、川がカーブしている場所は特に深くえぐれていました。今見ると川の勢いはだいぶ穏やかですが、雨がたくさん降ると、その勢いがすごくなるんだなと思いました。全体的に泥が堆積していて、想像以上で驚きました。訪れた家の人が倉庫からお皿を取り出して泥を落としているのを見て、その倉庫が丸ごと水に浸かつたんだなと実感しました。

⑥お菓子配り(配食)で感じたこと

訪れた家のほとんどが笑顔で迎えてくれ、喜んでくれて、「遠くからわざわざ来てくれてありがとう」という感じで受け入れてくれました。最初は緊張して少し怖かったけれど、刃地の人たちはとても優しく、活動が終わる頃にはみんなニコニコでした！人々の温かさを感じました。失敗点は、「琥珀糖です！」と言っても、「何？」と反応されてしまったことです。ちょっとやらかしたかなと思いました。

⑦RQで過ごして感じたこと

自分ができることをできる限り頑張ろうという雰囲気が感じられました。初めて来た人にも、RQがどんなことを考え、どんな想いで活動しているのかを伝えていて、みんなが刃地や依頼者にどれだけ尽くせるかを考えているのが伝わってきました。自然と笑顔になれる空気感がとても好きでした！それに、食事も

おいしかったです。

⑧あなたの思う復興(ふっこう)って何？

剣地の復興において、建物も大切ですが、一番重要なのは人の心だと思います。どれだけ建物が綺麗になっても、その人の心が失われてしまったら、それは本当の意味での復興とは呼べないと思います。地域の色や人々の声、そして活気こそが、復興にとって最も大切だと感じています。

⑨あなたの思うボランティアって何？

人間は助け合わなければ生きていけません。困った人、疲れた人、心が傷ついた人に、少しでも気持ち程度でも寄り添って、お互いに前を向けるように頑張ることが大切だと思います。変な話ですが、話し相手になること、片付けをしないこともボランティアだと思います。誰かのためという気持ちが大切だと感じています。実際に被災者と関わり、泣いて喜んでくれる人や、生き返ったようにたくさん話してくれる人がいて、こちらが元気をもらうことができました。

⑩他に何かあれば

どんなに関わりのない人でも、目的ややりたいことが同じだったら仲良くなれるのだなと感じました。一緒に行ったメンバーはもちろんですが、RQにいた人たちも同じです。だから、全く知らない人でも、1日経てば自然と馴染んでいるのだなと感じました。

寝た場所についてですが、ダンボールベッドは寝袋があったおかげで意外と快適でした！もし寝袋がなかったら、床で寝ることになったかもしれません。寝返りをうつだけでも音が気になったり、細かな音にも敏感になったりして、周りに気を使わなければならない空間がストレスに感じそうだと思います。武道館を貸し切りで使えてよかったですが、もし違う場所だったら絶対に寝られなかったと思います。なぜなら、小さな音も響くし、仕切りがないためプライベートがまったく確保できなかったからです。その場所には「モノ」が置いてあり、それを見るたびに、ここでどんな生活をしていたのだろう、どんな仕事をしていただろう、何が好きだったのだろうと考えさせられました。少し苦しく感じる瞬間もありました。

●恒川玲（2年）

①印象に残ったできごと、言葉などは？

お菓子配りした家の人を追いかけてくれていた事

②行く前にどんな思いがあった？

前回行った時とどんな風が変わったか・前よりも良くなっているはず！

③被災地見学・体験

なんもなくなっちゃった朝市をみて寂しい気持ちと、前に進んでいるのかなって気持ち・氾濫後の川があんまり小さくなくて、こんな小さな川でもあんなことが起こってしまうのか、と怖くなった朝市のヤバさを観て欲しかったが、更地になっていて見てもらえなくて残念だった。前に進んでいるのかなと感じた。しかし、少し離れたらまだまだ片付いていない状況が残っていた。もっと全体的に片付いて



いると思った。

④ 深見地区でどんなボランティア活動をしたか

スギさんが集めた床下の泥をすくって運ぶ・泥だらけの部屋の清掃・ちょっとした物、畳運び

④ 水害にあった深見地区で感じたこと

地震が来て大変なのに大雨でまた酷いことになってしまって自分が深見地区の人だったら立ち直れないかもって感じた。深見地区の人たちは家を見捨てずに綺麗にされていて、すごいなと感じた。どのような思いでボランティアを頼んだのか分からないが、前を向いていてすごい。

⑥ お菓子配り(配食)で感じたこと

前回のお菓子配りの事を覚えてくれている人がいて嬉しかった。おばあちゃんがずっと「すみません」を連呼していて悲しくなった。

⑦ RQ で過ごして感じたこと

明るくてフレンドリーで相手の気持ちを考えて行動する人達でこんなボランティアさんが来たら依頼者の人も安心出来るのかなと感じた。

⑧ あなたの思う復興(ふっこう)って何？

被災者の人に限らずみんなが前に進んでいこうと思えたら復興が始まるのかなと思った。

⑨ あなたの思うボランティアって何？

自分に出来る事をする事

⑩他に何かあれば

朝市をみると前に進んでいる感じがしたけど、ちょっと離れて橋の向こう側に行ってみると「まだまだ全然だな」って感じた。

小田中陵珀（1年）

① 印象に残ったできごと、言葉などは？

お菓子配りで訪問した家で、ある女性が涙ながらに「娘が輪島に住んでいて、ボランティアさんに助けてもらった。」と話してくれました。この話を聞いて、能登では多くの方が助け合いながら復興に向かっていてのだと強く感じました。

② 行く前にどんな思いがあった？

僕の家族は障がい者で、いろんな人に助けてもらいながら生活しています。だからこそ、僕も何か他の人を助けることができるようなことをずっとしたいと思っていて、このボランティアに参加しようと思いま



した。

③被災地見学・体験

テレビや新聞で見るよりも、実際に現地で被害を身近に感じることができました。液状化や隆起現象などは、実際に見てみないと理解しにくいことだと感じました。実際に見ることができて、とても良かったし、改めて自分の想像がいかに甘かったかを実感しました。

④深見地区でどんなボランティア活動をしたか

家の床下に溜まった泥をスギさんが取り出し、レイ先輩が一輪車に乗せて、僕が川に戻しに行く作業を行いました。また、水害で床上に溜まった泥を高圧洗浄で綺麗にする作業もしました。

⑤水害にあった深見地区で感じたこと

こんなにも普通の川が、大きな水害によってあれほどの被害を出すとは信じられませんでした。しかし、地震との相乗効果であそこまでの被害が出たのだと考えると、自然の恐ろしさを改めて感じました。

⑥お菓子配り(配食)で感じたこと

地震や豪雨でトラウマを抱えた人が多く、公費解体の時の重機の音が、自分が体験した時の音に似ていて、あまり眠れないという人がいました。それほどまでに住民の皆さんは心に深い傷を負っていたのだと思いました。

⑦RQで過ごして感じたこと

地元の人たちがIBに集まって交流しているのを見て、それが地元の人たちにとって安心できる場所になっていると感じました。それは、真摯にボランティア活動をしているダイゴさんがいるからだと思います。また、ボランティアチームとして、聾者や高校生などさまざまな人々を受け入れるという気持ちがあれば、誰でも歓迎される雰囲気がとても良いと感じました。

⑧あなたの思う復興(ふっこう)って何？

地元の人たちが安心でき、安心して安全で安定した生活を送ることができるようになることが最終的な目標だと思います。

⑨あなたの思うボランティアって何？

地元の人たちが難しいことを代わりに行き、地元の人たちが安心して暮らせるようにする活動です。

⑩他に何かあれば

このような機会を与えてくださったRQ 能登や平和と命を考える会の皆さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

熊谷友宏（1年）

① 印象に残ったできごと、言葉などは？

琥珀糖やいりこ、パプリカ、カボスを渡した時、みなさんが嬉しそうに受け取って一緒に話したことが印象に残っています。特に、おばあちゃんに琥珀糖を渡した時、涙を流しながら「遠いところから能登までありがとう」と言われたことがとても心に響きました。



② 行く前にどんな思いがあった？

小田中に誘われて、能登の人たちをお手伝いしたいという気持ちが盛り上がりました。自衛隊が撤退したから、そこまで酷くないだろうと思っていたのですが…。

③ 被災地見学・体験

輪島の中心に行くと、砂ぼこりが舞い、周りの道はぼこぼこでした。ビルが倒れていたり、崩壊した家屋が残っていたりしました。朝市の場所も、もう建物が倒れ、撤去作業が行われているところでした。また、海の陸地が上がり、海の面積が減っており、その辺りには大量の貝殻が散らばっていました。

④ 深見地区でどんなボランティア活動をしたか

土嚢や壁材の運搬、そして家の泥を運び出す作業を行いました。

⑤ 水害にあった深見地区で感じたこと

酷い現状を目の当たりにしました。道路はボコボコで、一部の道は崩壊していました。家の下まで泥が押し寄せていたのを見て、正直圧倒されました。もし自分の地元があんな風になったら、恐ろしいし、考えたくもないです。

⑥ お菓子配り(配食)で感じたこと

ほとんどの人が喜んでくれて、こちらも「来て良かった」と思いました。琥珀糖などを渡すと、皆さんがとても喜んでくれて、色んな話をしてくれました。

⑦ RQ で過ごして感じたこと

ボランティアの皆さんがとても優しく、たくさんお世話になりました。ご飯やお菓子、寝場所まで用意していただき、本当に感謝しています。

⑧ あなたの思う復興(ふっこう)って何？

前の暮らしに戻れた時。

⑨ あなたの思うボランティアって何？

住民の人のニーズに合わせる事。



④ 鳳来東小学校へのボランティア報告会

2024012.2

能登に思いを込めて「今、私たちのできることを」

地震からもうすぐ1年、大雨の被害から2か月強になる能登。大きな被害が続き、黄柳野高校ボランティアチームは「私たちに何かできないか」と常に考えていました。

そして、募金活動を経て5月に現地ボランティアへ。そして水害被害が重なり、11月に2回目のボランティアへ。

活動を経て感じたことは、現地に行ってもできること、現地でなくてもできることをやっぴいこう！ということでした。その1つは能登応援団を増やすことです。

能登から離れた地域で過ごしていると、能登の復興はだいぶ進んでいると思いがちです。でも水害もあり、能登ではまだまだ人手などが必要です。能登を忘れない。能登への思いを込めて。

能登応援団を増やそう！と奮起し、地元新城市の小学校「鳳来東小学校」へボランティア活動の報告をしにいきました。

地震・水害で傷ついた集落で感じたこと、ボランティア活動を通して感じたこと、そして本当の復興とは何かを考え、思ったことを語った高校生たち。

自然の恐ろしさを感じながらも、避けて通れない日本という国で、どのように生きていくのか。

活動中に被災された方々との温かな出会い、心通わせた時間。そしてボランティアってどんなものなのか…を考え、語りました。

人との繋がりを感じながら過ごした活動。

そして、高校生たちは、心の繋がりにから明日への希望を感じたできごとなどを語りつくしてきました。

小学生も高校生が用意した体験型の報告や心のこもった報告で、終始食い入るように聞いてくれました。

6年生から「ボランティアって荷物などを運ぶものかと思っていたけど、他にも地域の人との交流などもあるって初めて知った」など、高校生が大切に伝えた心の繋がりが印象に残ったという感想をもらいました。能登はまだまだ応援団が必要です。

黄柳野高校ボランティアチームは応援団を増やしていきたい。そんな思いを込めて活動していこうと思います。



実体験を交えた報告

校長先生も参加してくれました



被災の状況を小学生にもわかりやすく伝えるために



RQ能登の理念（団体HPより）の紹介

一般社団法人 RQ 災害教育センターは、東日本大震災の被災地支援のために結成されたボランティア組織「RQ 市民災害救援センター」から発展して誕生した組織で、2011 年 12 月 7 日に設立されました

1.大規模な災害現場で、さまざまな救援活動をする仲間たちを支援します。

当面は RQ 市民災害救援センターから独立した組織を中心に、東日本大震災関連の支援をいたします。

2.「災害教育」を推進し、これからの社会を生き抜く人材を育成します。

私たちは災害教育を、「被災者、ボランティア、被災地への訪問者らが、被災地や被災者の窮状に接して抱く貢献の感情を、人格的成長の資源として捉え、教育体系に位置づけるための取り組み」と定義しました。

この資源は、災害ボランティア活動はじめ、被災地との関わりを通して得られるヒューマンで災害に強い社会形成に不可欠なものとして捉えています。机上ではなく災害の現場で学ばせていただくことで、私たちが本来持っているさまざまな生きる力を引き出し、これからの社会を生き抜く人材を育んでいきたいと考えています。

3.まだ社会的に聞き慣れない「災害教育」という教育分野を、調査・研究によって確立していきます。

大きな自然現象などから発生したさまざまな災害による社会問題を解決するために、「災害教育」がどのような役割を果たすのか、専門家や研究者のみならずと共と考えていきたいと思えます。

これらの活動を推進していくためには、さらなるみなさまのご協力やご支援が必要です。

支援金をはじめ、事務局運営、情報発信、人材育成、共同研究などにおいて引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

●RQ能登コーディネーター醍醐さんより：活動後（2024.11 ボラ後）にいただいたメッセージ

素直さが素敵な、あるがままの高校生を再び受け入れることができ、良い時間となりました。こちらこそ、ありがとうございました。引き続き、応援団を担ってください！



⑤ 【2回目の災害ボランティアを終えて】

スタッフ：池田さちえ

4月に個人的にRQ能登にお世話になり、ここに高校生たちを連れていきたい！と思い、実現した5月。そして9月に水害があり、再び「何かできることを」という思いから、黄柳野高校として2回目の訪問をしました。

RQ能登は災害復旧とともに「災害教育」という理念を掲げ、必ず起こるであろう「災害」に対してどう向き合っていくのか、未来をどう生きていくのか…ということを実際の現場で学べる環境を作ってくれています。その一貫として黄柳野高校もお世話になりました。

そこで感じたのが心の繋がりで。

9月下旬の水害は地震とともに2重被害といわれているもので、実際に現場を目の当たりにした時、その被害に対して言葉が出ませんでした。地震から9か月間尽力していたRQ能登コーディネーターも「水害後の1週間は精神的にもしんどかった」と言っていました。

それでも私たちが訪問した地域では、ボランティアの休憩場所などを提供してくださり、温かく迎えてくれた地域の方々が出て、時に一緒に作業をし、時に話し相手になってくれ、穏やかで心地の良い空間でした。まるで家族のような空間。

ボランティアさん同士も同様です。その場・その時に会った人たちにも関わらず、相手を尊重し、心豊かに過ごせる時間。それぞれの経験と思いが過剰に重なり合うのではなく、相手の気持ちを汲み取りながら活動していく様子がありました。笑顔の絶えない時間でした。

なぜ、そんな時間があるのか…

2月にRQ能登が活動を開始した時、そして9月の豪雨後、被災された方々は未来への希望を失いかけていたと思います。そんな中でRQ能登が大切にしたのは被災された方々の思い。1人1人違う思いです。その思いを大切にしていき、地域の方々次第にRQ能登を信頼し、なくてはならない存在になっていったと思います。そして、その思いは全国からくるボランティアさんたちにも伝わっていました。

次第に元気になっていく地域の方々を目の前にしたRQ能登は、9月豪雨で心が挫けそうになっても、その地域の方々の、立ち上がる姿に逆に勇気もらったのではないのでしょうか。

お互いの心と心が繋がっていった結果が今の姿ではないかと思いました。

そして、その大人たちの姿を見て、高校生たちも感じていました。人の心の可能性と希望を。生きている中で苦難は必ず訪れます。その時に何を信じて生きることを選ぶのか。その信じるものが今回の活動の中にあっただと思います。

挫けそうになる心、絶望、それでも立ち上がろうとする心、相手を思う心、相手を信頼する心、希望、無条件の人間信頼。

高校生たちは最初は緊張していましたが、RQ能登で過ごす中で、人の心を吸収し、学び、そして、その真っすぐな思いを地域の方、ボランティアさんたちにも伝え始めました。その姿は純粋な思いが滲み出ているかのようでした。

すると次第に他のボランティアさんも彼らの思いに呼応するように、一緒に語り合い、心を込めて真剣に向き合ってくれました。心と心が繋がり、大きな輪になっていることを感じました。それが未来を変えていく力になっていくのではないのでしょうか。未熟で未完で、そしてまっすぐな感性が周りにいた大人たちの心を動かしていました。何者にも染まっていない思いが私たち「大人の原点となる思い」を呼び起こしてくれたのです。人の心を信じる「人間信頼」から生まれた、お互いの心の響き合いでした。

これから先、また災害は起こる。そして、人は間違いも犯すし、時に相手を傷つけてしまうこともある。

でもその反対も必ずあるのです。困難な場と出会った時、何を信じて生きていくのか…

高校生たちは、その答えに触れてきたように思います。希望に触れてきたと思います。

未来を希望に変えていくのは、彼らが触れた人の心にあると思います。何を信じて生きるのか、今一度、自分自身に問いたいと思いました。